

# 協励アカデミー 令和5年度 第3回漢方・皮膚セミナー レポート

開催日 2023年(令和5年)9月24日(日)  
開催方法 Zoomによるオンライン配信(配信元:協励会館)

## ●漢方

指導講演  
東京中央・フジモト薬局  
馬場 英二先生  
「漢方基礎講座  
～望診・問診について～」  
「秋の季節の漢方」

## ●皮膚

指導講演  
千葉・一心堂薬局  
佐藤 勝利先生  
「季節に応じた症状への対応  
～秋・冬～」

2023年(令和5年)9月24日(日)  
12時より、協励アカデミー令和5年度第3回漢方・皮膚セミナーがZoomによるオンライン配信で開催され、総勢94名の参加がありました。

まず「協励十訓」を唱和したのち、最初の指導講演である漢方の部を東京中央・フジモト薬局の馬場英二先生に、「漢方基礎講座～望診・問診について～」「秋の季節の漢方」という二つのテーマでご講

演いただきました。

冒頭、(株)セブン-イレブン・ジャパンを創設された鈴木敏文先生の著書『売る力 心をつかむ仕事術』(文藝春秋)とマーケティング・ブランディング戦略コンサルタントの橋本之克先生の著書『ミクロ・マクロの前に 今さら聞けない 行動経済学の超基本』(朝日新聞出版)をご紹介くださり、「お客さまのために」ではなく「お客さまの立場に立つ」、心理学と経済学を掛け合わせたものが行動経済学であることや、本気の人にはチャンスがやってくることなど、これらの本の要点をご説明くださいました。

望診では、舌診について詳しくお話しいただきました。胃に熱があれば舌は乾燥し、反対に胃が冷えていれば舌は潤う、舌が肥大していればむくみがあり、特に舌の周囲に歯形がつくような場合には五苓散を用いる、舌先が赤くなっていれば心熱(血液に熱)があり、その場合、皮膚が乾燥して赤

くなっていることが多く、黄連解毒湯、温清飲などを用いる、舌に瘀血<sup>おけつ</sup>がある場合にはものもらいや子宮筋腫などになっていることがある、舌を出したとき斜めに出る<sup>わいしや</sup>(歪斜)場合は脳梗塞の特徴であり、すぐに受診勧奨することが必要など、Zoomならではの映像を交えて解説していただきました。

後半の「秋の季節の漢方」では、秋はぜんそく、咳、痰など喉や気管支の不調を訴える方が多く、各処方についてご説明いただきました。小青竜湯の証で肺に熱がありひどいぜんそく発作を起こしている方に、肺の熱の強い症状に用いる小青竜湯加石膏を使ったところ、1カ月後に毛が抜け顔がむくむといった症状が現れたそうです。それは処方がよく効いている証拠とのこと。逆に肺に熱がない場合には他の場所の熱や肺の熱を余分にとってしまい手足が冷えてしまうので肺中冷を治す甘草乾姜湯が良いとのことでした。

選定品では健康食品扱いです



東京中央・フジモト薬局 馬場英二先生



千葉・一心堂薬局 佐藤勝利先生

が、「温芯」がこれにあたります。発熱がなく汗が出てゼイゼイする方には麻黄杏仁甘草石膏湯（麻杏甘草湯）が良いとのこと。他にも、越婢湯、甘草附子湯を用いる場合もあるそうです。麻杏甘草湯は身体のなかから沸き出してくるような汗や、咳をすると汗がダラダラと出てくるような汗に用い、ゼイゼイとして汗が出てくるが沸き出してくるような汗ではない場合には、桂枝加厚朴杏子湯を用いるとのことでした。他にも柴胡桂枝乾姜湯は精神不安に苦しむ方、筋痛症（筋肉を針で刺されるような痛み）にも用いることができ、鎮痛剤の代わりにはカルシウム（馬場先生はニッポー電解カルシウム、ブリルCa・D3を使う）が効果的とのことでした。

続いて皮膚の部では「季節に応じた症状への対応～秋・冬～」と題し、千葉・一心堂薬局の佐藤勝利先生にご講演いただきました。

秋から冬にかけては昼と夜の長さがほぼ同じになる秋分の日から

乾燥と冷えが増し、皮膚では乾燥により角質がめくれて白く見えるようになることのほか、手のひらと足の裏、唇には皮脂腺がなく特に荒れやすいので、油分を足してあげる必要があるとのこと、汗は冬に出にくいので余計に皮膚が乾燥することなどをお話いただきました。

夏に起こりやすい汗疹の場合は、毛穴が何らかの原因で詰まって炎症が起きているので治るのも早いですが、皮膚の乾燥と炎症（慢性）は生活環境やストレス、睡眠不足なども関係し、ターンオーバーも考えると時間がかかるうえ、特にかいてしまうと1カ月は治らないとのことでした。そのようなときは冷やすことでかゆみが治まるので、アイブリーナイオンミストで冷やすと良いとお話いただきました。

また今年は夏が暑かったために体力や免疫力が低下し、帯状疱疹の患者さんが増えるだろうとのことでした。帯状疱疹は上肢～胸背部、腹背部、頭部～顔面の順に出やすく、ピリピリ感が2～3日続いた

後に水疱ができ、14日ほどでかさぶたになって治癒しますが、場合によっては神経痛が残ってしまうとのこと。特に頭部の帯状疱疹は重要で見つけ次第すぐに受診勧奨を行わなければいけない、頭部の神経に沿って発症してくるので視神経系では目がかすむ（重症化すると失明）、聴神経系では耳が聞こえづらい、嗅神経系ではにおいがしにくい、味が分かりにくいなどのサインを見逃さないことが重要とのことでした。

今年の夏は特に気温が高く、新型コロナウイルス感染症も5類になったとはいえ収束は見通せず、インフルエンザは例年よりも早い時期から猛威を振るっています。日本の四季も崩れてきているように感じますが、季節ごとにかかりやすい疾患を学ぶことにより店頭で臨機応変に生かせると思います。そのためにも、今後も漢方・皮膚セミナーへの積極的なご参加をよろしくお願ひします。

（レポーター 学術研修委員長 田中大嗣）